鹿児島ゆかりの洋画家たちの師弟関係

学芸専門員　肥　後　盛　秋

Ⅰ　はじめに

日本への洋画導入時期の歴史を紐解くと，西洋文化を取り入れるべく，明治初期には多くの画家たちが西欧に留学をし，新しい表現技法の獲得に励んだことから始まります。また，1876（明治9）年には，国としても日本最初の美術教育機関である工部美術学校に，イタリア画家を招聘し，西洋画を教授するための画学科の設置をしています。しかし，明治10年代後半からは国粋主義の流れにより，1883（明治16）年には，工部美術学校は廃校になり，日本洋画は冬の時代を迎えました。

1889（明治22）年には，アーネスト・フェノロサと岡倉天心によって，東京美術学校（現在の東京芸術大学）が開校されますが，国粋主義の流れが強い当時は，日本の伝統美術のみが教えられました。同年，留学から帰国した洋画家と工部美術学校で学んだ画家たちは，明治美術会を結成して日本の洋画黎明期の危機に立ち向かいました。フランスから帰国した黒田清輝も，はじめは明治美術会の展覧会に出品をしています。後に，白馬会を結成して日本洋画団の中心に立つことになります。

1896（明治29）年に，東京美術学校に西洋画科が設置され，黒田清輝をはじめとする白馬会の画家たちが中心に指導者になり，ようやく日本で洋画のアカデミズムが構築されました。

日本の中央洋画壇の歴史を振り返ると，明治から昭和にかけて大きく二つの時期に「鹿児島ゆかりの洋画家」たちの功績を確認できます。

一つ目は，日本の洋画導入時期から東京美術学校西洋画科の設置までの，アカデミズム構築の時期において，床次正精，曽山幸彦，黒田清輝，藤島武二，和田英作の名が挙げられます。

二つ目は，日本へのポール・セザンヌの紹介を起点として始まる，自由な表現活動の場である在野団体設立時期において，有島生馬の名が挙げられ，また有島のもとに集まった黒門会の画家として東郷青児，山口長男，海老原喜之助，吉井淳二らの名も見逃せません。

一方，鹿児島の郷土洋画壇の幕開けは，上京して先輩画家に学び，後に帰郷した画家たちが，故郷の美術界をリードしたことから始まり，戦前には一回目の黄金期を迎えます。戦後は海老原喜之助，吉井淳二らの手によって，鹿児島の洋画壇は発展・継承されて現在に至ります。

今回は，18名の鹿児島ゆかりの洋画家の間に見受けられる，師弟関係の系図を作成しました。日本の中央洋画壇と鹿児島の郷土洋画壇での功績，師弟関係，時代，活動内容などから，関連性を紐解いていきます。

Ⅱ　日本と西洋の美術史の比較表について

まず，今回登場する18名の鹿児島ゆかりの洋画家と，深く関係する洋画家１名を，日本と西洋の美術史の比較表（下表１）にて紹介します。

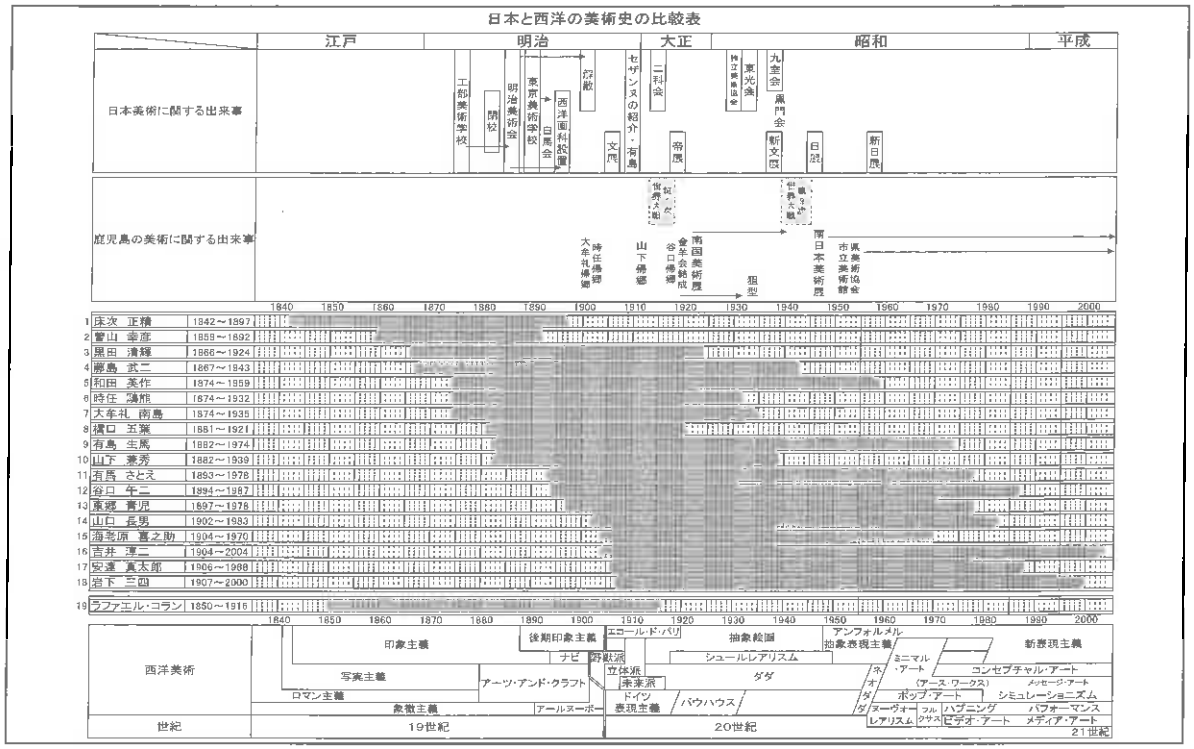

表１

日本と西洋の美術史の比較表の見方

(1)　日本美術に関する出来事

18名の鹿児島ゆかりの洋画家に関係する，日本の中央洋画壇での出来事をまとめています。明治初期から中期における，日本で洋画のアカデミズムが構築されるまでと，ポール・セザンヌの紹介を起点として始まる，自由な表現活動の場である在野団体設立時期に大きく分けて考えられます。

(2)　鹿児島の美術に関する出来事

上京した後に帰郷した画家たちが，鹿児島の美術界をリードしますが，戦前には一回目の黄金期を迎えます。第二次世界大戦を境に，戦後は海老原喜之助，吉井淳二らの手によって，鹿児島の洋画壇は発展・継承されて現在に至ります。

(3)　鹿児島ゆかりの洋画家の生没年棒グラフ

18名の鹿児島ゆかりの洋画家を，出生順に棒グラフで表しています。画家の師弟関係を探る上で，年齢による関係を見て取れます。また，ラファエル・コランは，日本洋画導入時期に，深く関係する洋画家として紹介します。

(4)　西洋美術

今回取り上げる，日本美術に関する出来事と鹿児島の美術に関する出来事と比較して，洋画の本流である西洋美術の動向を見て取れます。

Ⅲ　18名の鹿児島ゆかりの洋画家の紹介

1　床次　正精（とこなみ　まさよし）

出　身：鹿児島市

師　：能勢一清（郷土狩野派絵師）

「薩摩潟」1895（明治28）年頃

鹿児島市に生まれ，幼時から郷土の絵師「能勢一清」について狩野派の絵を学びました。1865（慶応元）年，島津久光の命により外国事情視察のため長崎に赴き，同港に停舶していたイギリス艦船内で油絵を見て関心を持ちました。明治維新後，司法省に入り後に検事となり，1876（明治９）年には，宮城上等裁判所検事として仙台に赴き，一方で洋画を独学で研究し，油彩による風景画や肖像画を多く描きました。旧御物に1896（明治29）年作「噴火山之光景」があります。顔料や画布も手製の明治初期にあっては，異色の日曜画家（アカデミックな教育を受けていないという意味）の草分けであります。

2　曽山　幸彦（そやま　さちひこ）

出　身：鹿児島市加治屋町

師　：サン・ジョヴァンニ（イタリア，日本で最初の国立美術学校である工部美術学校画学科の三代目教授，1880（明治13）年来朝）

「日光水屋」1890（明治23）年頃

鹿児島市に生まれ，叔父の歌人高崎正風をたよって上京，1880（明治13）年に工部美術学校に入学し，サン・ジョバンニに師事しました。ジョバンニは，とても厳しい教師でしたが，曽山は一番信頼された画学生であったといわれています。1883（明治16）年から工科大学博物館で画学を教え，1888（明治21）年に助教授になりました。翌年には明治美術会の結成に参加し，評議員を務めました。1890（明治23）年には，第３回内国勧業博覧会に「武者試鵠図」を出品し褒状を受けました。またこの年に大野家の養子となり，画塾を建て門弟の指導にあたりましたが，２年後にはチフスのため33歳の若さで亡くなりました（黒田清輝帰国の１年前）。しかしながら曽山に学んだ画家には藤島武二，和田英作，岡田三郎助などがおり，その功績は計り知れません。

※工部美術学校とは

1876（明治９）年に創設された日本最初の美術教育機関であります。工部大学校（東大工学部の前身）の付属機関としてヨーロッパの進んだ技術の摂取のために設置されました。設置学科は「画学科」「彫刻科」の二科で，純粋な西洋美術教育のみの機関でありました。

しかし，国粋主義の流れによって，1882（明治15）年に「彫刻科」，翌年には「画学科」も続いて廃止され，同校は廃校になりました。ここで学んだ画家は，日本洋画の黎明期に活躍することになります。明治美術会の設置にもこの画家達が中心になりました。

※明治美術会とは

明治10年代中頃，国粋主義の台頭から，工部美術学校は廃校になるなど洋画の危機を迎えます。1889（明治22）年に，同校出身者（十一会：工部美術学校画学科の初代教授フォンタネージに学んだ画家など，後任の教師に不満を抱き退学）が中心となり，明治美術会を発足しました。渡仏から戻った黒田清輝も参加しますが，1895（明治28）年の第７回展に出品した時に，旧派・新派に分裂し，新派の黒田は白馬会を結成します。

1901（明治34）年に，明治美術会は解散し，太平洋画会がその流れをくみ，白馬会と拮抗するように結成されました。

3　黒田　清輝（くろだ　せいき）

出　身：鹿児島市高見馬場

師　：ラファエル・コラン

（フランス国立美術学校教授，留学中の師）

「赤き衣を着たる女」
1912（明治45）年

鹿児島藩士黒田清兼の子として生まれ，幼くして叔父で明治政府の高官黒田清綱の養子になりました。1884（明治17）年に，法学研究のためフランスへ留学しました。1886（明治19）年には山本芳翠らの薦めもあり，ラファエル・コランに入門して本格的に絵の勉強を始めました。1893（明治26）年に帰国し，明るい外光派の作品を発表すると，日本画壇に大きな衝撃を与えました。翌年には，生涯親友の画家であった久米桂一郎と「天真道場」を創立し，多くの画家を指導しました。1896（明治29）年には，明治画壇に新風を巻き起こした「白馬会」のリーダーとして，また東京美術学校西洋画科の初代教授として，日本の洋画のアカデミズムをつくりました。多くの後進を育てながら画壇の中心を歩きますが，晩年には貴族院議員や帝国美術院長などの公務に追われ，制作に没頭できなくなります。裸体画の啓蒙普及，白馬会の結成，東京美術学校西洋画科の設置，文展の創設など，その功績ははかり知れず，日本近代洋画の父と称されています。

※ラファエル・コラン（1850～1916）について

フランスの画家で，アカデミックな作風で成功し，1902年にフランス国立美術学校の教授になりました。明治の先駆的な日本人洋画家たちの，フランス留学中の師として，日本画壇と深い関わりがあります。黒田清輝，久米桂一郎，和田英作も留学中はコランに師事し，帰国後，日本の洋画壇に新風をもたらし，近代洋画推進の原動力となりました。

※白馬会とは

山本芳翠は，いち早く黒田清輝の才能を認め黒田に画家の道を薦め，帰国した黒田に自分の画塾と門人を譲りました（後に天真道場）。山本は明治美術会に属しましたが，やがて白馬会を結成する黒田に，日本の洋画界を委ねた形になりました。

帰国して明治美術会第７回展に出品した黒田や久米，後進の画家達の作品は明るい色彩で，対象をいきいきと捉えた表現として称賛されました。新聞は黒田たちを，新派あるい

は紫派，それに対して会員たちを旧派や脂派という呼称で書いて，あたかも対立しているように書き立てました。1896（明治29）年，ついに黒田は久米や天真道場の画家達と白馬会を結成しました。1911（明治44）年に解散，後に光風会となります。

4　藤島　武二（ふじしま　たけじ）

出　身：鹿児島市池之上町

師　：平山東岳（郷土四条派絵師）

川端玉章（円山派絵師，東京美術学校設立時の日本画教官の一人）

曽山幸彦，中丸精十郎，松岡寿，山本芳翠（明治美術会）

「蒙古の日の出」1937（昭和12）年

鹿児島藩士の子として生まれ，幼い頃から郷土の画家平山東岳について，四条派の絵を学び芳洲と号しました。1885（明治18）年に上京し，川端玉章に師事してさらに修行を積みました。この間，日本画家として展覧会でいくつかの賞を受けました。

1890（明治23）年には，長年の希望であった洋画の勉強のため曽山幸彦の画塾に通い，続いて中丸清十郎，松岡寿，山本芳翠などの明治美術会の画家に学びました。1891（明治24）年には，明治美術会に入会し通常会員となって出品を重ねます。1893（明治26）年に三重県尋常中学校助教諭になりますが，３年後の1896（明治29）年には，「白馬会」会員となり出品をするようになります。さらに同年に，黒田清輝のすすめで東京美術学校の助教授になりました。1905（明治38）年から1910（明治43）年にかけて（黒田清輝に約20年遅れて）フランス，イタリアに留学し，新しい画風の研究を行い，帰国後は東京美術学校の教授になりました。1912（明治45）年３月には，岡田三郎助と本郷絵画研究所を設立し，その後川端画学校（明治42年に川端玉章が創立）に洋画部が新設され，藤島はその指導者として多くの画家の指導にあたりました。

1914（大正３）年の二科会結成の際は，黒田清輝と有島生馬らの板挟みとなり苦心しました。装飾的かつ雄大な作風は国際的にも評価され，日本洋画の一つの到達点となりました。

5　和田　英作（わだ　えいさく）

出　身：肝属郡垂水村（現垂水市）

師　：上杉熊松（明治学院図画教師）

曽山幸彦，原田直次郎（明治美術会）

黒田清輝，久米桂一郎創設の「天真道場」

ラファエル・コラン（パリ留学中）

「富士（河口湖）」1926（昭和元）年

垂水市に生まれ，1879（明治12）年に，両親とともに上京しました。1887（明治20）年に明

治学院に入学し，上杉熊松について洋画の初歩を学ぶようになりました。

1891（明治24）年には明治学院を中退，上杉熊松の薦めで曽山幸彦に入門しますが，曽山が急死したため，原田直次郎に学び明治美術会に出品をします。

1894（明治27）年には，黒田清輝・久米桂一郎の「天真道場」に移り，外光派の作風に衝撃を受け，画家としての技術を劇的に吸収していきました。1896（明治29）年の白馬会の結成に参加し，東京美術学校西洋画科の助教授となりますが間もなく辞退して，改めて東京美術学校西洋画科に入学しました。5ヶ月で卒業後，同校の教授助手になりました。

1900（明治33）年には，文部省の留学生としてパリに赴き，黒田清輝の師であるラファエル・コランの指導を受けました。1903（明治36）年にイタリアを経由して帰国し，東京美術学校西洋画科の教授となりました。1932（昭和7）年から1936（昭和11）年には同校の校長を務め，同校の名誉教授の称号を受けました。日本的情趣を持った堅実な写実で知られ，肖像画や薔薇，富士山などの風景画を多く残しました。

6　時任　鵰熊（ときとう　わしぐま）
出　身：鹿児島県姶良郡横川町
　師　：黒田清輝

「富士」
1901（明治34）年

姶良郡横川町に生まれ，後に菱刈町の時任家の養子になりました。

1897（明治30）年に上京し，黒田清輝の画塾（溜池町の白馬会研究所）にて学び，翌年，東京美術学校西洋画科に入学し，在学中は生徒成績品展で二等賞を受ける（後に美術学校資料館買い上げ）など洋画の勉強に励みました。1902（明治35）年の卒業の年に，第7回白馬会展に作品を出品しています。在学中は将来を嘱望されていましたが，卒業後は家庭の事情で郷里に帰り，鹿児島で教師をしながら，晩年は日本画をよく描きました。帰郷した時任に，黒田清輝は上京やフランス留学をすすめ，また藤島武二や和田英作とは交友もありましたが，再び東京に出ることはありませんでした。鹿児島洋画壇の表舞台に立つことも，あまりありませんでしたが，郷土鹿児島で活躍した洋画家の先駆者の一人といえます。

7　大牟礼　南島（おおむれ　なんとう）
出　身：種子島西之表市
　師　：黒田清輝
同　期：和田英作，赤松麟作，矢崎千代治

「五彩雲」
制作年不明

西之表市に生まれ，小学校卒業後，鹿児島に出て中学造士館に入学します。1894（明治27）年に上京し，東京美術学校西洋画科に入学しました。同期には，和田英作，赤松麟作，矢崎千代治らがおり，黒田清輝に師事しました。1900（明治33）年に卒業後，帰郷して鹿児島市西本願寺前に，あえて窓から中が覗ける造りのアトリエを開き，ここに通うアマチュア画家

が生まれました。春田屋呉服店のショーウィンドーに200号の大作を掲げて油彩画を宣伝するなど，当時において画期的な役割を果たしており，郷土画壇の先駆者といえます。一方で図画教師を勤め，1911（明治44）年には，鹿児島県立二中（現：甲南高等学校）の図画教師になり，谷口午二，安藤照，岩松淳（後の八島太郎），安達真太郎などを迎え，多くが東京美術学校に進学していることが注目されます。遅れて帰郷した山下兼秀らとともに，郷土の美術界のために大きく貢献しました。

8　橋口　五葉（はしぐち　ごよう）

出　身：鹿児島市樋之口町

師　：内山一観（郷土の狩野派絵師）と伝えられる
橋本雅邦（木挽町狩野派の流れをくむ新狩野派，
門下生に横山大観，川合玉堂，下村観山ら，
東京美術学校設立時の日本画教官の一人）
黒田清輝

「化粧の女」1918（大正7）年

鹿児島市に生まれ，10歳の頃から地元の日本画家内山一観について絵を学んだと伝えられます。中学校卒業後に上京し，日本画の大家橋本雅邦に師事しました。その後，親戚である黒田清輝の薦めで，溜池町の白馬会研究所にて油絵を学ぶようになり，1901（明治34）年に東京美術学校西洋画科に入学，成績優秀により特待生となりました。1905（明治38）年美術学校を卒業，この年には，夏目漱石の「吾輩は猫である」の装幀を手掛けました。1907（明治40）年第1回文展には，油絵の「羽衣」が入選，東京勧業博覧会に「孔雀と印度女」を出品し好評を得ました。1911（明治44）年には，三越百貨店が募集した懸賞ポスターに応募し，浮世絵風の美人画が一等に入選し，名が広くしられるようになりました。しかし，この頃から脚気を病んで体の自由がきかなくなり，ついに油絵の制作をあきらめ浮世絵の研究に没頭しました。浮世絵の版元渡辺庄三郎と出会い，江戸時代から続く伝統的浮世絵版画を制作するようになりました。五葉版画の特色は，伝統的な浮世絵技法によりながら，版元の指揮によらず，画家五葉の方針で制作したことであります。「大正の歌麿」と呼ばれています。

9　有島　生馬（ありしま　いくま）

出　身：横浜市月岡町

師　：藤島武二（藤島家に寄寓）

「画室」
1908（明治41）年

横浜市に生まれますが，父武は薩摩川内市の出身であります。兄武郎は小説家・評論家として，弟の里見弴は小説家として知られ，有島三兄弟として名高いです。本籍地の薩摩川内市平佐で病気療養中に，イタリア人宣教師に影響されて西洋への関心が高まり，東京外国語学校イタリア語科にて学びます。同校を1904（明治37）年に卒業後，藤島武二の家に寄寓し

て洋画の修行をしました。1905（明治38）年にはイタリアに留学し，ローマ美術学校に入学，その後ヨーロッパ各地を旅しました。明治40年代は，次代を担う新進芸術家が相次いで留学しており，この頃に多くの芸術家と交友を深めました。

1910（明治43）年に帰国，この年に創刊された『白樺』の同人になり，同誌でポール・セザンヌを初めて日本に紹介しました。1913（大正２）年，文展の審査に不満を持ち，翌年には初の在野団体である二科会を創設し出品を重ねました。1935（昭和10）年には，帝国美術院会員に任命され，二科会を脱退し一水会を創立しました。1937（昭和12）年には，日本芸術院会員になり，一水会や日展に出品を重ねました。

1939（昭和14）年には，在野団体の画家の集まりである黒門会を結成し，東郷青児・海老原喜之助，山口長男，吉井淳二といった若手作家たちと親睦を深めるなど，近代日本の美術の自由な発展への功績は大きいです。画家として，文学者としての創作活動を通して，優れた業績を残しました。

10　山下　兼秀（やました　かねひで）
出　身：鹿児島市
　師　：黒田清輝
同　期：橋口五葉

「爆発当時の桜島」
1914（大正３）年

鹿児島市に生まれ，中学造士館を卒業後に上京して東京美術学校に入学，同窓には橋口五葉がいました。黒田清輝に学び白馬会の会員になりました。山下は黒田の信頼が厚く，黒田葵橋研究所の後継者とも思われていましたが，ヨーロッパに留学する直前に母が急死したため，1912（大正元）年に帰郷しました。以後，山形屋百貨店の初代宣伝課長を勤める傍ら，多くの作品を残しました。1914（大正３）年の桜島大爆発を描いた連作が代表作です。先に帰郷した大牟礼南島らとともに，1921（大正10）年の金羊会結成に参加，また1923（大正12）年の南国美術展の創設にも尽力しました。常に鹿児島洋画壇の中心に位置し新風を吹き込み，後進の指導にあたりました。

11　有馬　さとえ（ありま　さとえ）
出　身：鹿児島市山下町
　師　：岡田三郎助
（本郷洋画研究所：藤島武二とともに設立）

「ウクレレのある静物」
1953（昭和28）年

鹿児島市に生まれ，幼い頃から水彩画の絵葉書を集めるなど，絵の好きな少女でありました。鹿児島県立一高女（現：鶴丸高等学校）に入学しますが，1911（明治44）年に中退し画家を志して上京，岡田三郎助に師事しました。1914（大正３）年の第８回文展に21歳で初入選し，以後，文展や帝展に出品を重ねました。

1919（大正８）年には，女流美術家団体「朱葉会」の創設に参加，その後光風会にも出品するなど，意欲的な活動をしました。1926（大正15）年の第７回帝展で，女性初の特選となり注目され，翌年には洋画部門で女性初の無鑑査に推挙されました。有馬の作品は，前・中期においては人物画が中心で，晩年には花を中心とする静物画が多くなります。大正・昭和前期という女性芸術家，特に洋画家としての活動がままならぬ時代において，光風会名誉会員，日展参事なども務め，その先鞭をつけた作家としてよく知られています。

12　谷口　午二（たにぐち　ごじ）

出　身：鹿児島市山之口町

師　：大牟礼南島（第二鹿児島中学校），山下兼秀
黒田清輝，藤島武二，
和田英作（東京美術学校）
橋口五葉？（五葉の浮世絵の再版を手伝う）

「家族」
1941（昭和16）年

鹿児島市に生まれ，第二鹿児島中学校で大牟礼南島に学び，同じくして山下兼秀の指導も受けました。1913（大正２）年に東京美術学校に入学し，黒田清輝・藤島武二・和田英作に一年ずつ指導を受け研究科まで進みました。在学中には橋口五葉のアトリエに通い，浮世絵の再版を手伝いました。1919（大正８）年には家庭の事情で帰郷し，翌年から第一高等女学校（現：鶴丸高等学校）で教鞭を執ることになります。

1921（大正10）年には，山下兼秀らと金羊会を結成し，翌年には，鹿児島市樋之口町にアトリエを新築し，この場所が鹿児島のサロンとなりました。1923（大正12）年には，鹿児島新聞社（南日本新聞社の前身）からの依頼を受けて，山下兼秀，河本其山らと南国美術展（戦時中，第17回展にて終了）の創設に大きな役割を果たすなど，戦前の郷土画壇の黄金時代をつくりました。1932（昭和７）年には再び上京しますが，1954（昭和29）年に，鹿児島市立美術館の初代館長を拝命し帰郷しました。

※金羊会とは

谷口午二の鹿児島市樋之口町のアトリエに，大牟礼南島をはじめ多くの画描きが集まり，鹿児島に本格的な洋画グループとして誕生しました。岩松淳（八島太郎）をはじめ青年画家が20数名集まりました。

13　東郷　青児（とうごう　せいじ）

出　身：鹿児島市下荒田町

師　：有島生馬（黒門会），竹久夢二

「レダ」
1968（昭和43）年

鹿児島に生まれますが，1902（明治35）年に一家そろって東京に移住しました。1909（明治42）年に青山学院中等部に入学し，この頃から絵を習い始めました。近所に竹久夢二がお

り大きな影響を受ける一方，山田耕筰のすすめで前衛画家としてスタートしました。

1915（大正４）年頃の作品は，作曲家山田耕筰の協力でできたアトリエで，ヨーロッパの新しい絵画の動きを聞きながら制作されました。1916（大正５）年には，初個展を催し有島生馬の知遇をえて二科展への出品を薦められ，同年の第３回二科展では「パラソルさせる女」が二科賞を受けました。師と仰ぐようになった，郷土の先輩有島生馬から深い理解が得られ，以後二科会を中心に活躍しました。1919（大正８）年から1928（昭和３）年にわたりヨーロッパで生活し，ダダや未来派などの本格的な作品に触れ，最終的に前衛絵画から万人に好まれる絵へと方向転換をしました。

戦後は二科会の再建に尽力し，大衆化路線や海外との交流などの東郷路線を打ち出し，二科会会長も務めました。

14　山口　長男（やまぐち　たけお）

出　身：京城府本町通（韓国ソウル），本籍：薩摩川内市平佐

師　：岡田三郎助（本郷絵画研究所）

和田英作（東京美術学校３年次）

佐伯祐三（パリ留学時代）

有島生馬（黒門会）

同　期：猪熊弦一郎，牛島憲之，小磯良平など

「影」1963（昭和38）年

韓国のソウル市に生まれる。本籍は薩摩川内市平佐であります。1921（大正10）年に上京して本郷絵画研究所や川端画学校に通い，その後東京美術学校西洋画科に入学，3年次には和田英作に師事しました。1927（昭和２）年，東京美術学校を卒業後，パリに渡りました。学生時代に二科展で佐伯の作品を見て感動し，敬愛していた佐伯祐三を直ぐに訪問しました。翌年の２月には佐伯らと写生旅行をしています。（同年の８月に佐伯は死去）後にオシップ・ザッキンに出会い，キュビズムの影響を受けました。

1931（昭和６）年に帰国，二科展に出品して初入選を飾り，1938（昭和13）年に二科展の会友に推挙，同年には二科九室会の結成に参加しました。しかし戦争激化に伴い，二科会への出品と会友をも辞退し，1944（昭和19）年には兵として招集されました。終戦後の1945（昭和20）年10月には，郷土の先輩東郷青児の献身的な努力によって二科会が再建され，山口は新会員として迎えられました。東郷青児らとともに二科会の再興に尽力しました。

1954（昭和29）年には，武蔵野美術大学教授に就任，多くの国際展に意欲的に出品し，日本の抽象絵画の第一人者になりました。

15　海老原　喜之助（えびはら　きのすけ）

出　身：鹿児島市住吉町　祖父：喜太郎に育てられる

師　：川端画学校

有島生馬（黒門会）

藤田嗣治（フランス留学中）

同　期：吉井淳二（県立志布志中学校在学時）

「火を運ぶ」
1962（昭和37）年

鹿児島市に生まれ，1917（大正６）に鹿児島県立志布志中学校に入学，吉井淳二と同期で，はじめ軍人を目指しますが，次第に油絵に熱中し1921（大正10）年に上京，川端画学校で絵の勉強を始めます。有島生馬らからフランス留学をすすめられ，美術学校への進学をやめてフランス語も学ぶようになりました。1923（大正12）年にフランスに留学し，モンパルナスに住む藤田嗣治を訪ね，以後指導を受けるようになりました。1927（昭和２）年にサロンで称賛され画商ロシェと契約し，独特の青い色彩で雪景色を描き人気作家となりました。その間にベルギーの女性と結婚し，1933（昭和８）年に帰国するまで，パリを中心に活躍しました。

1935（昭和10）年，独立美術協会の会員として迎えられ，第５回独立美術展に作品を出品，以後この会を中心に作品発表を行いました。1946（昭和21）年，鹿児島の代表的な美術展である「南日本美術展」を，吉井淳二とともに創設し晩年まで審査委員長を長く務めました。1959（昭和34）年には，「南日本美術展」に海外美術留学制度を提唱，県下の財政界の有力者達を説得し，その基金によって１年間ヨーロッパ留学をさせる現在の形を作りました。郷土美術の振興に尽力した画家であります。

16　吉井　淳二（よしい　じゅんじ）

出　身：鹿児島県曽於市末吉町

師　：川端画学校

和田英作（東京美術学校３年次）

有島生馬（黒門会）

同　期：海老原喜之助（志布志中学校）

「フェイラ（サルバドール）」1975（昭和50）年

1917（大正６）年に志布志中学校（現：志布志高等学校）に入学，海老原喜之助と同期でした。少年時代から絵が得意で，画家になることを目指しました。1922（大正11）年に上京，川端画学校に通い始め1924（大正13）年に東京美術学校に入学し，３年次に和田英作に師事しました。1925（大正14）年には，21歳にして二科展に入選し，以後連続出品をしています。1929（昭和４）年，美術学校卒業後，フランスに渡り，1932（昭和７）年まで留学しました。帰国直後の第19回二科展に，滞欧作９点を特別出品し，会友に推挙されました。1940（昭和15）年には二科会の会員になり，一貫して二科会の中心作家として発表しました。

疎開先の郷里で終戦を迎え，同窓の海老原喜之助とともに，1946（昭和21）年，「南日本美術展」を創設しました。海老原の死後，同展の審査委員長を務め，海外美術留学制度を「海老原賞」と改称，1976（昭和51）年には，「海老原賞」（隔年）の間に「パリ賞」を設けることを提唱，実現しました。終戦後は，東郷青児らと二科会の再建に尽力し，1979（昭和54）年には二科会の理事長も務めました。また出身地で末吉町洋画展を創設するなど，郷土の美術界の発展に多大な功績を残し，多くの画家を育てました。

17　安達　真太郎（あだち　しんたろう）

出　身：兵庫県姫路市生まれ，
　　幼少時より鹿児島市で育つ

師　：大牟礼南島（二中時代の美術教諭）
　　川端画学校（清水良雄：東京美術学校
　　西洋画科卒，黒田清輝，藤島武二に師事）

「平佐水鉢のある静物」1963（昭和38）年

姫路市に生まれますが，幼少時から鹿児島市で育ちました。鹿児島県立二中を卒業後，上京して川端画学校に入学し，清水良雄に師事しました。美術学校を目指しましたが，師から美術学校に行く必要がないと，技術の高さを認められて進学をすることをやめました。

その後，白日会や光風会を中心に活躍し，作品は高く評価されました。特に光風会では23歳で会友推挙され，若くして会員になり同会の中心的な存在になりました。1927（昭和２）年には，第８回帝展に入選し，その後も連続入選を果たし，改組日展へも作品を発表しました。1940（昭和15）年には，日展委嘱，光風会評議になりました。

1964（昭和39）年に渡仏し，シャルダンなどのオランダ静物画の画風に共鳴し，クラシック絵画の研究を行うようになり，オランダ静物画派の画風を目指しました。印象派をはじめとする，抽象的・主観的な絵画が氾濫する現代美術に反発し，一貫して細密描写を追求しました。1969（昭和44）年には，日展，光風会から退き，晩年はあらゆるグループから離れ，細密描写の第一人者として独自の道を歩きました。

18　岩下　三四（いわした　みつし）

出　身：鹿児島県大島郡喜界町

師　：熊岡美彦（藤島武二に師事した画家，
　　東光会旗揚げ）

「霧島眺望」
1994（平成６）年

大島郡喜界町に生まれました。1926（大正15）年に第一師範学校を卒業後，奄美大島や鹿児島の小学校で教師をしていました。1931（昭和６）年に本格的な絵画の勉強を志して上京，昼間は小学校の教師をしながら，夜間に熊岡洋画研究所にて洋画の勉強をはじめました。1933（昭和８）年には，師である熊岡美彦らが主宰した東光会に，旗揚げから参加しました。

第１回東光展，第14回帝展に入選し，東光会，日展を中心に活躍するようになりました。1940（昭和15）年には，小学校職を辞め熊岡洋画研究所の講師になりました。

戦後の1947（昭和22）年には，帰郷して鹿児島師範講師になりました。その後，1971（昭和46）年の退官まで，鹿児島大学教育学部の講師，助教授，教授として学生の指導に当たりました。大学での学生の指導や鹿児島県美展の審査など，郷土の美術界に大きく貢献しました。岩下の指導を受けて現在活躍している美術教諭や作家は多くいます。

Ⅳ　郷土画家の師弟関係について

郷土画家の師弟関係系図（下図１）では，出生順に上から「絵師・画家」を配置しています。鹿児島ゆかりの「絵師・画家」は，太い線で囲んでいます。また，鹿児島の洋画家に関係する画家は，細い線で囲んでいます。「絵師・画家」を結ぶ線は師弟関係を表し，上部が師，下が弟子という図式になります。師弟関係を表す線が重なる場合に，破線と二重線を使用していますので，線種による意味の違いはありません。

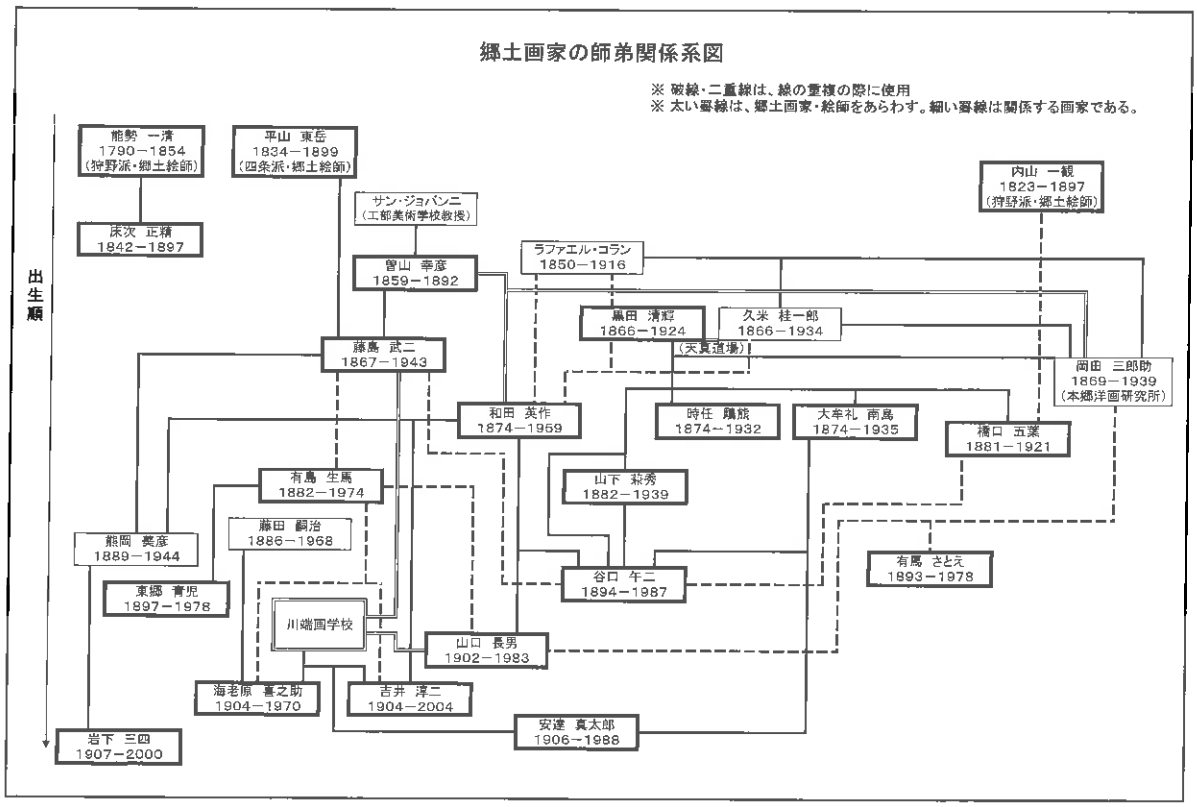

図１

１　日本画家との師弟関係

明治初期には，日本画家に絵を学んだ画家が多く見受けられます。時代の変わり目に膠彩画である日本画を学び，後に油彩画へと表現技法を変えていきますが，材料や技法，技術理論などは大きく異なるため，相当な努力が必要であったと想像できます。

(1) 能勢一清と床次正精の師弟関係

床次は，幼時から鹿児島の狩野派絵師である能勢一清に，狩野派の絵を学んでいます。1876（明治９）年から宮城県仙台市の裁判所検事を勤める傍ら，洋画の研究を行いますが，キャンバス地に日本画の材料である胡粉や膠を上手く活用しています。

(2) 藤島武二の日本画の師弟関係

藤島は，15歳から鹿児島の四条派絵師である平山東岳に日本画を学び，芳洲という雅号を用いています。17歳の時，洋画研究を志し上京しますが，洋画を学ぶ方策を見出すことができず帰郷します。1885（明治18）年，18歳の時に再び上京，円山派の日本画家川端玉章に入門し，玉堂という雅号を与えられました。藤島の本意は洋画を学びたかったようですが，22歳までは日本画の展覧会にも出品し，いくつかの賞を受けました。

(3) 橋口五葉の日本画の師弟関係

1894（明治27）年に造士館中学に入学，この頃から鹿児島の狩野派絵師内山一観に日本画を学んだと言われます。1899（明治32）年19歳の時上京し，はじめは橋本雅邦に入門して日本画を学びますが，後に白馬会研究所に通い洋画に転向しました。

2 明治美術会と白馬会に見受けられる師弟関係

(1) 明治美術会，曽山幸彦の師弟関係

黒田清輝がフランスに留学している頃，1889（明治22）年に明治美術会が発足され，曽山幸彦は結成に参加しました。曽山は大野家の養子になって絵画教室を開き，藤島武二，和田英作らに，洋画の手ほどきをしています。しかし1892（明治25）年に，曽山はチフスのため33歳の若さで生涯を閉じます。その後，藤島，和田は明治美術会の画家に絵を習いました。もし曽山が健在であれば，その後の日本美術史の展開は変わっていたかも知れません。

(2) 白馬会，黒田清輝の師弟関係

フランスから帰国した黒田清輝は，はじめは明治美術会の展覧会にも出品します。しかし，これまでの明治美術会の作風と，ラファエル・コランに学んだ外光派の明るい色調で描いたアカデミックな作風は異なりました。1894（明治27）年には，山本芳翠から画塾と門弟を譲り受け，久米桂一郎と「天真道場」を設けます。ここに和田英作は入門します。

黒田は1896（明治29）年５月に東京美術学校西洋画科の指導者に就任します。６月には明治美術会を離れ白馬会を結成，伊勢にいた藤島武二を白馬会会員として受け入れ，8月には同学校の助教授に迎え入れています。また，９月に和田英作も助教授に任じています（和田は，直ぐに辞退し，同学校４年級に入学，５ヶ月で卒業し教授助手になります）。

3 東京美術学校西洋画科の師弟関係

東京美術学校西洋画科に黒田清輝，藤島武二，和田英作の三名が指導者として就任し，多くの鹿児島の若者が後を追うように同校に入学していきます。白馬会に出品した画家，中央画壇で活躍した画家，帰郷した画家など，彼等の歩んだ道は多様であります。

(1) **東京美術学校卒業，白馬会に出品，中央画壇で活躍**

橋口五葉

(2) **東京美術学校卒業，白馬会に出品，後に帰郷**

時任鵬熊，山下兼秀

(3) **東京美術学校卒業後に中央画壇で活躍**

山口長男，吉井淳二

(4) **東京美術学校卒業後に帰郷**

大牟礼南島，谷口午二

4　自由な表現活動，在野団体で活躍した黒門会

有島生馬が行った「ポール・セザンヌの紹介」を起点として始まる在野団体の設立。有島のもとに集まり，在野団体に属した黒門会の画家たちには，東郷青児，山口長男，海老原喜之助，吉井淳二がいます。アカデミズムからの解放や主観的な表現，抽象画の制作など，自由な表現活動の場を求めていきます。黒田清輝，藤島武二，和田英作が日本のアカデミズムを形成したのに対し，黒門会は現代美術の先駆けになり，西洋との芸術的な時差は無くなっていきました。

5　鹿児島の郷土洋画壇の幕開け，戦後の復興，現在までの継承

(1)　戦前の黄金期

上京して東京美術学校西洋画科に学び，後に帰郷した画家たちに，時任鵬熊，大牟礼南島，山下兼秀，谷口午二がいます。大牟礼，山下は谷口のアトリエに集い，本格的な洋画グループである金羊会をつくり，洋画の普及を行いました。また1923（大正12）年には，鹿児島新聞社からの依頼を受けて，南国美術展の創設に大きな役割を果たし，戦前の郷土洋画壇の黄金時代をつくりました。

(2)　戦後の復興，現在までの継承

戦後，郷土洋画壇の復興にあたったのは，海老原喜之助と吉井淳二でした。1946（昭和21）年，現在も鹿児島の代表的な美術展である「南日本美術展」を，海老原と吉井が創設し，審査も長く務めました。1959（昭和34）年には，「南日本美術展」に海外美術留学制度を提唱，県下の財政界の有力者達を説得し，その基金によって１年間ヨーロッパ留学をさせる現在の形を作りました。郷土美術の振興に尽力した画家であり，二人の功績は鹿児島の洋画壇に発展・継承されて現在に至っています。

「主要参考文献」

○「薩藩畫人伝備考下　巻」1915再版
○「明治絵画名作大観　下　洋画」同盟通信社1969
○「郷土人系　下」南日本新聞社1970
○「書畫鑑定指針第18巻，第24巻」吉岡班嶺1983
○「黒田清輝　藤島武二　和田英作　図録」鹿児島市立美術館1985
○「有島生馬　東郷青児　山口長男　図録」鹿児島市立美術館1986
○「鹿児島の美術　近・現代洋画の展開」中間芳孝1989
○「橋口五葉展　図録」佐藤光信1995
○「日本美術館」折橋俊英1997
○「岩下三四画集　卒寿をこえて」岩下三四，森田茂1998
○「20世紀回顧　鹿児島と洋画展　図録」鹿児島市立美術館2000
○「藤島武二展－ブリジストン美術館開館50周年記念－図録」
　　石橋財団ブリジストン美術館，石橋財団石橋美術館，日本経済新聞社2002
○「西洋美術史　増補新装　第８版」高階秀爾2009
○「日本美術史　増補新装　第７版」辻惟雄2009